2020年10月2日発行（創刊2002年3月31日）

仙台文学館ニュース

第三十九号

Sendai Literature Museum News

エッセイ
あかまつの道を抜けて
第1回――「小綬鶏（こじゅけい）」

佐伯一麦

仙台文学館へ行くときは、天気が好ければ、地下鉄の台原駅から台原森林公園に足を向け、〝あかまつの道〟を抜けて辿るようにしている。

森の小径のところどころには、樹木の名前を尋ねるクイズ形式の表示板がある。〈小枝は秋に葉をつけたまま落ちる〉〈1945年中国の奥地で発見されるまでは化石として知られ、死滅したものと考えられていた〉と書かれたヒントを読んで、背の高い樹を見上げては、「メタセコイアかな」と目隠しになっているプレートをめくってみて、「当たり！」と子供のように気を弾ませながら、次の表示板を目指して歩く。

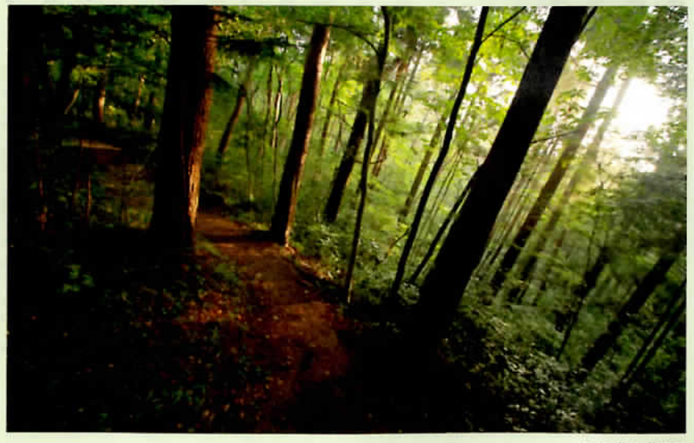
「とうかえで（唐楓）」「まてばしい」など、ここで正式名を覚えたものの、次に通りかかったときには名前をすっかり忘れてしまっていることもある。それもまた、そのつど新たに知ったような心地となって悪くはない。

脇のこんもりとした森のほうから、鶯の「ホーホケキョ」のほかに、「チョットコイ、チョットコイ」と小綬鶏が啼き、「シシシ……」と藪雨（やぶさめ）が啼いているのが聞こえてくる。雉（きじ）の仲間の小綬鶏は、かつては自宅のある大年寺山の林でも、朝の寝起きの際などによく聞こえていたが、この頃はさっぱり聞かれなくなった。聞こえたと思うと、ペットとして飼われていたのが籠抜けして席巻するようになった画眉鳥（びび）の啼き真似だったりするので、本物の啼き音には懐かしさがともなう。

小綬鶏は、万葉集にも出てくる鶯や雉とはちがって、日本に在来していた鳥ではなく、中国の南部が原産で、大正八年に東京や神奈川で放鳥されたのが最初で、その後は狩猟の獲物として多数が放されてきたのだという。もともとは、画眉鳥と同じく外来種だった訳である。

特徴のある啼き声は、詩や小説に彩りを添えてくれそうだが、以前、時代小説に詳しい知人が、江戸時代を舞台とした小説に小綬鶏が出てくる不自然さを指摘していて、なるほどと感心させられたことがあった。

（さえき かずみ　作家・仙台文学館館長）



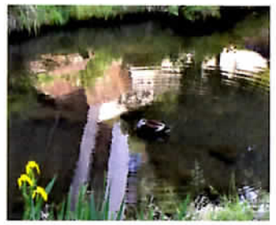
写真：佐々木隆二

CONTENTS

エッセイ
「あかまつの道を抜けて」佐伯一麦 ……1
シリーズ
「私の一冊」平田オリザ ……2
特集1
佐伯一麦新館長に聞く ……4
特集2
仙台文学館 この秋・冬の特別展 ……6
文学館日誌 ……8

仙台文学館 公式ツイッターの写真から

「佐左木俊郎展」では仙台在住の漫画家・スズキスズヒロさんがイラストを手がけてくださいました。



休館の影響もあってか、カモ、ツバメ、ハクセキレイ、コジュケイなど、野鳥の姿を間近で見かけました。

梅雨が長引いた今年、文学館の庭では多彩なキノコがすくすく生長。

「みんなで作ろう 妖怪絵巻」には、市民のみなさまから個性あふれる妖怪イラストが寄せられました。

館内に職員手編みの「アマビエ」が登場。「アミビエ」の愛称でツイッターでも大活躍。

文学館日誌

2020年4月～8月

4月	1日	佐伯一麦新館長着任。
	11日	新型コロナウイルス感染拡大防止のため、5月11日まで臨時休館。その後、臨時休館が6月1日まで延長となる。企画展の開幕が先延ばしとなり、イベントは軒並み中止に。
5月	19日	宮城県の緊急事態宣言解除に伴い開館（一部のスペースを除く）。企画展「作家・編集者 佐左木俊郎 農村と都市 昭和モダンの中で」オープン（8月2日まで）。
6月	2日	2階交流コーナー・情報コーナーを、座席数を減らし再開。
7月	18日	2階ギャラリーで「背守り」小パネル展開催（8月23日まで）。
8月	1日	日立システムズホール仙台にて、こまつ座公演「人間合格」（作：井上ひさし）上演。
	8日	1階エントランスで「疫病退散！みんなで作ろう 妖怪絵巻」（市民から寄せられた妖怪イラストの展示）を開催（8月30日まで）。
	18日	常設展示室内で、学芸員がイチ押しする「おすすめ資料コーナー展示」を開催（9月22日まで）。
	30日	今年度の「仙台文学館ゼミナール」が始まる。定員の半減、換気の徹底など、例年とは異なる状況での実施。

交通のごあんない

■バス利用の場合

〈宮城交通バス〉

○仙台駅西口バスプール2～4番乗り場
仙台北・泉地区方面行
（急行・北山トンネル経由を除く）

〈市営バス〉

○仙台駅西口バスプール4番乗り場
八乙女駅行

※いずれも「北根二丁目・文学館前」下車

■地下鉄利用の場合

地下鉄南北線「台原駅」下車、
南1番出口より徒歩約25分
（台原森林公園内あかまつの道経由）
※山道です。雨天時は道が滑りやすくなりますので、ご注意ください。

■駐車場40台（無料）

台数に限りがございます。なるべく公共交通機関をご利用ください。

カフェ ひざしの杜

お食事、デザート、各種お飲み物などをご用意しています。
お得なランチメニューもあります♪

［営業時間］
10:00～16:00（ラストオーダー15:50）
※ランチは10:00～14:00
TEL 022-219-1341

仙台文学館ニュース　第三十九号

公益財団法人
仙台市市民文化事業団
仙台文学館

〒981-0902 仙台市青葉区北根2-7-1
TEL 022-271-3020　FAX 022-271-3044
https://www.sendai-lit.jp/

「仙台文学館ニュース」のバックナンバーを掲載しています。

この印刷物はリサイクルできます。

シリーズ「私の一冊」第33回

平田 オリザ

井上ひさし『父と暮せば』

戯曲というのは慣れないと、なかなか読みづらい。

小説に比べて情報量が少ないし、海外の戯曲だと登場人物の名前と、その愛称が異なったりして誰が誰のことを話しているのか分からなくなる。劇作家の私ですらそうなのだから、一般の方にとって戯曲は、読み物としては敷居が高いのかもしれない。

しかし戯曲を読む楽しさもある。

まず、実は戯曲はお手軽だ。どんなに長いものでも、二、三時間で読めてしまう。上演を前提として書かれている以上、物理的にそれより長くなることはない。

情報量が少ない分、自分で空想の翼を広げることができる。慣れてきたら、好きな役者さんを頭に浮かべて、配役などを考えながら読んでみるのもいい。

初めて戯曲を読むという方には、井上ひさしさんの『父と暮せば』をお薦めしている。

まだ原爆投下の記憶も浅い一九四八年の広島を舞台とするこの名作戯曲は、原爆で亡くなった父親の幽霊と、生き残った若い娘の二人だけの登場人物で構成される。二人芝居なので誰が喋っているのかと混乱することもないし、短い芝居なのですぐに読み切れる。映画化もされているので、戯曲を読んだ後には、そちらを観てもらってもいい。もちろん、舞台を観ていただくのが一番なのだが。

この作品の主題は、生き残ってしまった者の悲しみである。

哲学者鷲田清一氏は、東日本大震災の直後に、「この震災は、生き残った者にとって辛い災害になる」と語っていた。鷲田さん自身もまぢかに経験した阪神淡路大震災は、早朝、しかも耐震の備えの弱かった神戸を中心に起こったために、死者の大半は建物の倒壊による圧死だった。しかし東日本大震災は、午後二時半過ぎの時間帯、死者の大半は津波によるものだった。そのため様々なコミュニティが寸断され悲劇をうんだ。

家族を失った者、生徒を失った教師、職場の同僚を失った人々。生死を分けた理由は何もなく、なぜ自分だけが生き残ってしまったのかと嘆く声を多く聞いた。

井上さんは原爆のことを戯曲にしようと心に決め、広島を取材して回るうちに、生き残った者の後悔、申し訳ないという思いの声を、驚くほど多く聞いたという。そしてそれを、ストレートに作品にしようと考えた。

この戯曲が書かれたのは一九九四年。井上さんは、この後、一九九七年に、同じく広島を舞台にした『紙屋町さくらホテル』を新国立劇場のオープニング演目として書き下ろす。以降、二〇一〇年に亡くなるまで、戦中、戦後を舞台とした戯曲を多く残していく。意外に思われるかもしれないが、実はこの『父と暮せば』や、前年に書かれた『マンザナ、わが町』（大戦中の、アメリカにあった日系人強制収容所が舞台となっている）以前は、井上戯曲の主な舞台は明治・大正（いくつかの例外はあるが）で、その時代に生きる文学者などの評伝劇が中心であった。その意味でも、本作は井上さんの劇作家としての人生の一つの岐路になった戯曲だと言えるだろう。

当時、私は、ある演劇雑誌で三ヶ月に一度、井上さんと対談をするという至福の時を六年にわたってもっていた。なので、この転換期のことは、断片的ではあるが、ご本人から直接聞いている。

もちろん一つには、戦後五十年という節目が大きかったのだと思う。自分たち、直接戦争の記憶のある最後の世代（井上さんは敗戦時十歳）が、その体験を書き残さなければならないという気持ちが強くあった。だが私はもう一点、九六年の司馬遼太郎さんの死が大きかったのではないかと思っている。

井上ひさし
『父と暮せば』
（1998年 新潮社）

版画：明才

井上さんは司馬さんを大変尊敬しており、またある種ライバルだとも考えていた。よく知られる通り、司馬さんは、第二次大戦に兵士として参加までしながら、最後まで、それを小説にすることはなかった。この馬鹿げた戦争を、なぜ日本が始めてしまったかが司馬文学の最大のテーマだったが、しかし大戦そのものを描くことは最後までなかった。司馬さんがやり残した仕事をという意識が井上さんにはあったのだと思う。

本作は、全編、ときにユーモアを交えつつ、美しい広島弁で綴られていく。

「おとったん、ありがとありました」という最後の台詞は、いつ読んでも（ここだけを読んでも）涙してしまう。

できれば、娘を持つすべてのお父さん、そして父を持つすべての娘たちに読んでもらいたい。実はこの作品は、原爆というテーマを離れても、父と娘という何か切ない関係を描いた名作なのだ。

ウイルス禍で、なんだか忘れ去られてしまいそうだが、今年は戦後七十五年、「広島には七十五年は草木も生えぬ」と言われた原爆投下から、四分の三世紀が経った。そして来年は震災から十年。残された者の悲しみを、もう一度、心にとどめておきたいと思う。

平田 オリザ
（ひらた おりざ）

劇作家・演出家・青年団主宰。1962年、東京生まれ。国際基督教大学教養学部卒業。

1995年「東京ノート」で第39回岸田國士戯曲賞受賞。1998年「月の岬」で第5回読売演劇大賞優秀演出家賞、最優秀作品賞受賞。2002年「上野動物園再々々襲撃」（脚本・構成・演出）で第9回読売演劇大賞優秀作品賞受賞。2019年『日本文学盛衰史』で第22回鶴屋南北戯曲賞受賞。その他多数の受賞歴がある。江原河畔劇場芸術総監督、城崎国際アートセンター芸術監督、こまばアゴラ劇場芸術総監督などを務めるほか、各地の大学でも教壇に立つ。2021年には兵庫県豊岡市に開学予定の国際観光芸術専門職大学（仮称）の学長に就任予定。

特集1

佐伯一麦 新館長に聞く

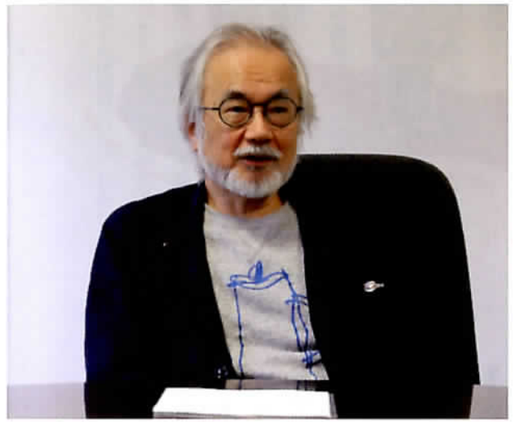
二〇二〇年四月、仙台在住の作家・佐伯一麦さんが仙台文学館の新館長に就任しました。「これまで仙台という土地に助けられて書いてきたので、還暦を迎えて、少しは仙台にお返しをする年回りかもしれない」との思いで引き受けたという佐伯さんに、これまでの当館との関わり、館長としての抱負などをお聞きしました。

写真：佐々木隆二（＊を除く）

――佐伯さんは館長就任前から長らく当館に関わってきてくださっていますが、当館にはどのような印象をもっていらっしゃいましたか？

開館（一九九九年三月）してすぐに講演をして、その後は「仙台文学館ゼミナール」で読書会やエッセイ講座（※）など、この二十年ほとんど途切れずに関わってきたので、館長になっても今までの延長線上という感じがします。

ホームページの挨拶文にも書きましたが、やはりここの文学館は地下鉄の台原駅から森林公園を抜けて散歩できる環境が好きですね。たとえば今の季節（六月）だと、ウグイスの鳴き声が聞こえるなかでゼミナールができる。今日も森林公園を通ってきましたが、分かれ道のところに展示の案内の看板があるのもいい（右下写真）。街なかからは離れているけれども、逆に



僕にとってみればそういう立地が楽しみなんです。

――「仙台文学館ゼミナール」を長年続けて、講師として感じたことはありますか？

熱心な受講生が多いですね。自分より年齢が上の方もいて、その方たちの豊富な人生体験に触れることが喜びでもあります。東日本大震災の年（二〇一一年秋から翌年にかけて）に川端康成の『雪国』を読んだとき、受講生のひとりが、「戦時中に『大菩薩峠』（中里介山の長編小説）を読んでいたら、家族から『こんな非常時に人非人だ』と言われたが、その時代に川端は『雪国』のような作品を書いていたことを見直したい」と感想を話してくれた。それを聞いて、単なる文学批評には現れてこない、『雪国』という文学作品と読者自身の人生体験とが結びついた、生きた人間と文学との関わりあいであると思いました。「文学は人生の隣にある」ということを、受講生の皆さんを通して感じることが多かったですね。

台原森林公園内「あかまつの道」入口にある看板（＊）

エッセイ講座でも、テーマを出して、それが思いもよらないような作品に反映されるのが非常に新鮮です。それは自由題では生まれてこないと思う。われわれプロの作家であっても必ずしも自由に作品を書けるわけではなくて、たとえば今回のコロナ禍であれば、そういう状況なりの言葉がどうしても求められる。もともと言葉というものは好き勝手にできないものではあるけれども、その制約のなかで、最大限の自由さというか自分の表現を見出すということも、エッセイ講座などを通して皆さんに感じ取ってもらえればという思いはあります。

――今のお話にも出た「コロナ禍」について、文学者としてどのようなことを感じましたか？

カミュの『ペスト』などが話題となっていましたが、たとえばシェイクスピアもペストの大流行のときに劇場が閉鎖されるなかで新作を書いていた。「ロミオとジュリエット」では、修道僧がジュリエットを仮死状態にして、それをロミオに伝える手紙を託した人物がペストの患者と接触して足止めされたために悲劇が起こる。そんなところにも伝染病が影を落としていた。文学も災厄とともにあったんだなと再認識させられました。

そう思って過去の文学を読むと、危機に対する促しみたいなものがある。華やかな恋物語だと思われている『源氏物語』にも伝染病や災害が描かれています。文学のなかの記録性というか、われわれが言葉をもつということには、災厄を記録して後世の人たちに危険を知らせるという役割がおのずとあると思います。たぶんこのコロナ禍が過ぎたら、世の中は「われわれはコロナに打ち勝った」などという言説になるでしょう。それが悪いことではないけれども、しかし、渦中にいたときにはどういう思いで生きていたのかとか、文学の素になるような個人の思いというものがどんどん忘れ去られてしまうのではないか。それに抗って今の状況を後世に残すためには、日記としてでも書き残して記録しておく必要があるのではないかと思います。

仙台文学館の企画展示室にて

――最後に、館長として今後やってみたいことがありましたらお聞かせください。

今の状況が収束したら、これまでのエッセイ講座を館長講座としてますます充実させられればいいですね。また、今年度の特別展や企画展はすでに前年に決まっていたものを引き継ぎますが、来年度からは企画の段階から一緒に考えてみたい。それから、文学は絵画とか音楽など他の芸術のジャンルとお互いに影響を与えあって成り立つ総合芸術であると思うので、文学者だけではないゲストを招いての対談などもやっていきたいです。

僕の文学は、人が見過ごしてしまいそうなことを仔細に見て観察して書く、そうすることによって文学表現になるという考えでやってきたので、先ほども言った文学館の自然環境なども、そういう意識で表現して皆さんに伝えていけたらいいと思います。まあとにかく職員の方々の助けを借りつつですが（笑）、どうぞよろしくお願いします。

――こちらこそ、どうぞよろしくお願いいたします。今日はどうもありがとうございました。

（二〇二〇年六月取材）

※これまでに「仙台文学館ゼミナール」で佐伯館長が講師を務めた講座は次のとおり。
二〇〇七～二〇一二年「佐伯一麦と読む現代の文学」、二〇一三年「佐伯一麦がつなぐ絵と文学～松本俊介、寺田寅彦、水上勉…」、二〇一四年「佐伯一麦が読むチェーホフ」、二〇一五年「佐伯一麦が結ぶ 文学と音楽」、二〇一六年～「佐伯一麦エッセイ実作鑑賞講座」（今年度のエッセイ講座の募集は締め切りました）
このほか、二〇〇六年から二〇〇八年にかけて開催した講座「芥川賞を取らなかった名作たち」は、朝日新書として刊行されている。

佐伯 一麦（さえき かずみ）

一九五九年仙台市生まれ。仙台一高卒業後に上京し、週刊誌記者や電気工の勤めの傍ら作品を執筆。著作に、『ノルゲ』（野間文芸賞）、『還れぬ家』（毎日芸術賞）、『渡良瀬』（伊藤整文学賞）、『山海記』（芸術選奨文部科学大臣賞）などの小説のほか、エッセイ集も多数。現在、『新潮』誌上にて「ミチノオク」を連載中。
二〇二〇年四月、井上ひさし、小池光に続き、第三代仙台文学館館長に就任。

特集2

予告

仙台文学館 この秋・冬の特別展

二〇二〇年度の秋・冬の展示は、漫画家として、またエッセイスト・絵本作家として、それぞれに独自の世界を創造するふたりのクリエイターとその作品を取り上げます。

ファンは必見！ もし作家を知らなくても、展示を見れば作品を読みたくなること間違いなし。ふたつ続けて見てほしい特別展をご紹介します。

10月～12月

安野（あんの）モヨコ展 ANNORMAL ［アンノーマル］

『ハッピー・マニア』『花とみつばち』『さくらん』『シュガシュガルーン』『働きマン』など、少女漫画から青年漫画まで活躍のフィールドを果敢に広げ、幅広い読者に喜びと力を与える物語を届けてきた安野モヨコ。

デビュー30周年を記念して、その格闘の軌跡を500点に及ぶ作品原画で辿るとともに、紙版画の技法で描いた『オチビサン』や美人画などを手がける卓越した絵師としての側面もご紹介します。普通でない（UNNORMAL）、安野モヨコ（ANNO）の「ANNORMAL［アンノーマル］」な作品世界をご堪能ください。

左『ハッピー・マニア』1996年／右『働きマン』2007年
©Moyoco Anno／Cork

『オチビサン』2016年 ©Moyoco Anno／Cork

渋澤龍彦『バビロンの架空園』装画 2017年
©Moyoco Anno／Cork

［安野モヨコ］

1971年東京都生まれ。高校3年生で漫画家デビュー。1995年に連載を開始した『ハッピー・マニア』は今までにないセンセーショナルな恋愛ストーリーに多くの女性読者が共感。青年・少女漫画誌や新聞・週刊誌にも多彩な作品を描き分け、ドラマ・映画・アニメ化作品も多数。主な作品に『花とみつばち』『さくらん』『シュガシュガルーン』『働きマン』『オチビサン』『鼻下長紳士回顧録』のほか、エッセイ『美人画報』『くいいじ』や、監督・プロデューサーの夫・庵野秀明との結婚生活を描いたコミックエッセイ『監督不行届』など。2019年より雑誌「FEEL YOUNG」に『後ハッピーマニア』を連載中。

特別展「安野モヨコ展 ANNORMAL」

会期＝2020年10月4日（日）～12月13日（日）
休館日：月曜日（10月12日、11月23日は開館）、祝日の翌日、第4木曜日
○開館時間＝9:00～17:00（展示室への入室は16:30まで）
○観覧料＝一般800円、高校生460円、小・中学生230円（各種割引あり）

1月～3月

ふつうがえらい！ エッセイスト 佐野洋子展

『100万回生きたねこ』の作者として知られる絵本作家・佐野洋子。そのエッセイストとしての仕事にスポットをあてた特別展です。

佐野は、43歳ではじめてのエッセイ集を刊行したのを皮切りに、72歳で亡くなるまで多くの文章を書き残しました。自身の経験や日々の生活を飾らないことばで率直に綴ったそれらのエッセイは、佐野洋子独自の世界でありながらも、読者であるわたしたちに共感や元気を与えてくれます。その秘密は、佐野が終生もち続けた「ふつうがえらい」という感覚ではないでしょうか。

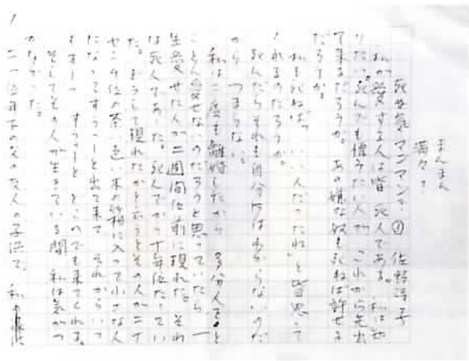
本展では、エッセイを中心に佐野洋子のことばを紹介するとともに、人物像やエピソード、絵の仕事についても触れ、その作品と人の魅力に迫ります。

佐野洋子 ©JIROCHO, Inc.

［佐野洋子］

1938年中国・北京生まれ。武蔵野美術大学デザイン科卒業後、百貨店の宣伝部勤務をへて絵本作家に。1977年に出版した『100万回生きたねこ』は、現在でも世代を超えて読みつがれるロングセラー絵本である。一方、雑誌や新聞にエッセイを連載するなど、文章にも才能を発揮した。おもなエッセイ集に、痛快なことばで日常の様々なことがらをとらえた『ふつうがえらい』『がんばりません』、自身の老いをユーモラスに綴った『神も仏もありませぬ』『役にたたない日々』、母親との確執をテーマにして話題となった『シズコさん』ほか。2010年、72歳で逝去。

佐野洋子のエッセイ集



エッセイの原稿
（『死ぬ気まんまん』）

絵本『100万回生きたねこ』
（初版1977年、講談社）

特別展「ふつうがえらい！ エッセイスト 佐野洋子展」

会期＝2021年1月16日（土）～3月21日（日）
休館日：月曜日、祝日の翌日（3月21日は開館）、第4木曜日
○開館時間＝9:00～17:00（展示室への入室は16:30まで）
○観覧料＝一般800円、高校生460円、小・中学生230円（各種割引あり）

【おことわり】
新型コロナウイルス感染症の状況により、展示の予定・内容が変更になる場合があります。変更が生じた場合は、当館ホームページ、SNS等でお知らせする予定です。

【ご来館のみなさまへのお願い】
○体調がすぐれない場合はご来館をお控えください。
○館内ではマスクの着用をお願いします。
○ご入館の際、サーマルカメラでの検温、手洗い、手指の消毒にご協力ください。
○会場の3密（密閉・密集・密接）を避けるため、入場制限をさせていただく場合があります。